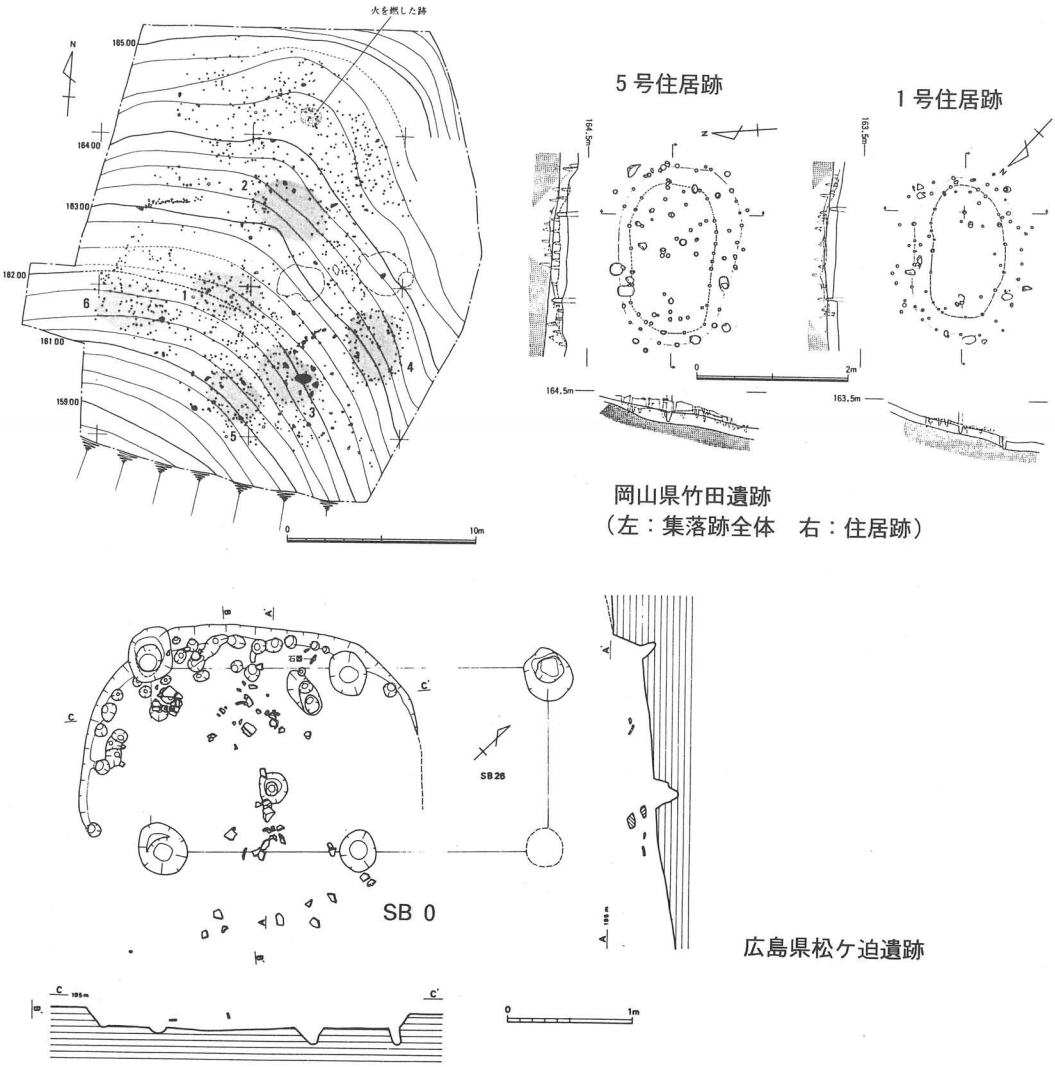
(2) 縄文時代早期の竪穴住居跡について

今回行なった堀田上遺跡の調査では，２つの遺構面で各々１棟，計２棟の縄文時代早期の住居跡を確認することができた。しかし，調査範囲が限られているため，集落全体の様子は明確にできていない。縄文時代早期集落跡全体が明らかになっている例は，西日本ではあまり多くないが，岡山県鏡野町竹田遺跡[119]では６棟の住居跡と屋外炉，福井県岩の鼻遺跡[120]では４棟のまとまりある住居跡が検出されており，前者は黄島式，後者は神宮寺式の段階に属するものである。堀田上遺跡は，丘陵先端部にさらに広がっており，同様に４～６棟前後の住居跡で構成されていることが予想される。

堀田上遺跡の住居跡の時期は，土器があまり残っていなかったことから不明な点があるが，遺構



第49図　中国地方における縄文時代早期集落跡と住居跡

面の状況や僅かな遺物よりみると，１号住居跡がⅠ類（神宮寺式併行），２号住居跡がⅣ類（高山寺式併行）の頃のものと思われる。規模も，明確ではないが，１号住居跡が径３ｍ余，２号住居跡が径４ｍ程度と小さいものであることが推定された。この時期の住居跡は，中国地方では竹田遺跡の他に，岡山県牛窓町黒島貝塚[121]，同川上村中山西遺跡[122]，広島県三次市松ケ迫遺跡[123]，東広島市西ガガラ遺跡[124]などで検出されている。規模は，竹田遺跡では長径４ｍ・短径2.5ｍ前後，中山西遺跡では長径３ｍ・短径２ｍのものが多く，松ケ迫遺跡SB0は長径2.75ｍである。また，岩の鼻遺跡では径７ｍと大形の住居跡もあるが，多くは径４ｍ前後のものであり，大川遺跡で径３～４ｍ前後のものが報告されている。したがって，堀田上遺跡の住居跡もこの頃のものとしては標準的なものと思われる。

また，堀田上遺跡１号住居跡の床面には，焼土面がみられ屋内炉があったとも考えられるが，集落構造が明らかになっていないので，その意義づけについては今後の課題としたい。

(3) 弥生時代前半期の集落跡について

縄文時代早期の集落跡の上層である暗褐色土上面では，弥生土器を伴う遺構が確認されている。調査範囲が限られているため，詳細は不明であるが，遺構の状況よりみて，集落跡の一部であると考えられる。

弥生土器（第44図）には，壷と甕の２種類がある。壷は，共に大きく口縁が開き，よく締った頸部に至るもので，３は口縁の端部に斜格子文，４は頸部に波状文と，６本が１単位となる12本の沈線，口縁端部に波状文が櫛状工具によって施されている。甕は，いずれも短く屈曲した口縁をもつものであるが，６・８のように突帯をもつものと，５・７のようにもたないものがある。これらの土器の時期は，施文や形態の特色よりみて，壷が弥生時代中期前葉，甕が前期末に位置づけられるものと考えられる[125]。

弥生時代前期末から中期前葉の集落跡は，瑞穂町市木地区より江川へ流れ下る八戸川流域では，現在のところ確認されておらず，堀田上遺跡がその初例となった。また，多数の弥生時代遺跡が確認されている瑞穂町田所地区を中心とする出羽川流域でも，前期後半に溯る遺跡は少なく牛塚原遺跡・順庵原Ａ遺跡・淀原遺跡が知られているにすぎない[126]。一方，中国脊梁山地の南側にあたる広島県大朝町の横路遺跡や下の谷遺跡では前期前半に比定される土器が出土している他，天盤門遺跡・洞泉寺遺跡・青木原遺跡・岡の段遺跡など前期の遺跡が多く知られている[127]。石見山間部の弥生文化がどうした系譜をもっているかについては，現在のところ不明と言わざるを得ないが，山陽側との関係も十分考慮する必要があると思われる。